青春の門

五木寛之

筑豊篇 上

講談社

青春の門　第一部　筑豊篇　上

著　者　五木寛之

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京　三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

第一刷発行　昭和五十年二月二十四日

©五木寛之　昭和五十年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。　(文2)　Printed in Japan

目次

骨噛みの山　7
さがり蜘蛛　13
夕陽と刺青　24
風の夜の相姦　38
夏の日の秘密　49
ひづめの割れた者　79
母を犯す日　113
別れと拳銃　125
私刑の午後　139

竜五郎かえる　152
少年の決心　165
殺すということ　177
オートバイの怪物　189
ふたりの女　201
殺人者を求めて　214
男たちの中で　225
男がひとりの時には　238
性の目覚めの中で　250
仰げば尊し　275

装幀　村山豊夫
題字　菅　甘林

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春の門

筑豊篇　上

香春岳は異様な山である。

決して高い山ではないが、そのあたえる印象が異様なのだ。

福岡市から国道二百一号線を車で走り、八木山峠をこえて飯塚市を抜け、さらにカラス峠と呼ばれる峠道をくだりにかかると、不意に奇怪な山容が左手にぬっと現われる。標高にくらべて、実際よりはるかに巨大な感じをあたえるのは、平野部からいきなり急角度でそびえているからだろう。南寄りの最も高い峰から一の岳、二の岳、三の岳と続く。

一の岳は、その中腹から上が、醜く切りとられて、牡蠣色の地肌が残酷な感じで露出している。山麓のセメント工場が、原石をとるために数十年にわたって休まずに削り続けた結果である。

雲の低くたれこめた暗い日など、それは膿んで崩れた大地のおできのような印象を見る者にあたえる。それでいて、なぜかこちら側の気持に強く突き刺さってくる奇怪な魅力がその山容にはあるようだ。目をそむけたくなるような無気味なものと、いやでも振り返ってみずにはいられないような何かがからみあって、香春岳のその異様な印象を合成しているのかもしれない。かつて戦国時代に、この一の岳に築かれた不落の名城があったという。その城を〈鬼ケ城〉と呼んだそうだが、いかにも香春

岳にふさわしい異様な山城のすがたが霧の奥から浮び上ってくるような気がしないでもない。

カラス峠から遠望する香春岳は、その斜面が幾分ゆるやかである。それが峠をくだって行くにしたがって、しだいに峻嶮な感じになってくる。後藤寺線の陸橋をまたぎ、中元寺川を越え、やがて田川の街に入るとさらにけわしく、三つの峰が相寄って見えはじめる。市内の繁華街を通り抜け、赤煉瓦の二本の煙突の下を走る栄町の道筋をたどりながら、ふと気づくと、町の家並みの背後に突き立ったようなすがたで巨大な三連峰が頭上にのしかかってくるのだ。商店の看板や電柱の間から迫る香春岳の山容は、はじめてカラス峠で目にした瞬間とはちがった印象で、また異様である。

曇天の下、頭部を醜く削りとられた香春連峰一の岳が屹立するすがたは、なぜか現在の筑豊のおかれている奇怪な現実を無言のうちに象徴しているようだ。明治の会社炭鉱開発以来、いくつかの戦争をはさんで劇的な盛衰をくり返してきたこの川筋の平野に、香春岳はいまセメント会社の手で少しずつその山容を、低く、平らに変えつづけて行こうとしている。

やがていつかは、香春連峰、一の岳の名が、かつて筑豊に存在した今はなき幻の山として伝説のように語られる日がやってくるのかもしれない。

骨噛みの山

伊吹信介は、子供の頃から香春岳を眺めるのが好きだった。

彼が物心ついた頃は、すでに香春岳のセメント採掘は始まっている。正確に言うと、信介の生れたのと同じ年、つまり昭和十年にセメント会社は山を削りはじめたのだ。

彼が生れてはじめて香春岳を意識したのは、父親の背中におぶさって、栄町の通りを帰ってくる朝のことだった。

どこから帰ってくるところだったのか、何のためだったか、その時の幼い信介にはまったくわかってはいない。ただ、父親の背中でうしろを振り返ったとき、正面に異様なまでに大きな山が見えたのだ。その山肌に傷ついたような白い裂け目があり、朝日の色に赤く染まって輝いていたのを彼ははっきりと憶えている。

そして、そのとき父親の横には一人の女がいた。父親は片腕で信介を支え、もう片方の手で女の手首を固く掴んでいたように思う。その女は、燃えるような目をしており、父親の顔をひたとみつめながら歩いていた。

女がはだしだったのを信介は不思議に感じた。父親は大股でゆっくり歩いていたが、それでも女は

時どき小走りに走ってついてきていたような気がする。女が走ると、泥に汚れた着物の裾が割れて、白い細い足が川魚の腹のように見えた。

信介が憶えているのは、そのへんまでである。後は、切れ切れにいろんな場面が入りまじり、積み重なって残っているだけだ。

「待たんかい」

と背後から呼んだ威圧的な男の声。

父親が立ちどまって振り返ると、また赤い香春岳が見えた。

「こ奴ば頼む」

と父親は言った。

それから父親の背からおろされ、信介は女に手を引かれて走ったのだ。息が切れると、背たけほどの草の茂みに投げ出すように体を伏せて、女は信介の顔を柔らかな胸に押しつけた。草の匂いと、濡れた土と、女の強い化粧の匂いがした。

「あんた！」

女が叫んで、跳ねおきたとき、父親は朝日の色を全身に浴びて立っていた。顔も、胸も、手の甲も、真赤だった。血が盛りあがるように流れて落ちていた。信介は恐ろしくて体が震えた。その真赤な父親の背後に、あの異様な香春岳の山肌があった。

〈あれは何という山だろう？〉

信介の内部に香春岳のすがたが焼きついたのは、その朝が最初だったように思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのとき彼の手を引いて走った女が、伊吹信介の二度目の母親のタエである。
信介を生んだ母親は、彼を世の中に送り出して、その晩、死んだ。だから信介は生母を知らない。
後年、父親の友人から聞いた話では、無口な、どちらかと言えば陰気で考え込む性格だったという。
この地方では、そういうタイプの人間は余り評判が良くないはずである。古くから〈川筋気質〉という独特の気風をはぐくみ、女も男同様に勇気と腕力を誇った土地柄だ。明治の頃は、筑豊のあちこちに名の通った女傑たちがいて、侠気をうたわれたものである。
明治から大正、そして昭和になっても、ヤマの女のそんな気性の激しさだけは失われていない。信介の二度目の母親になった森島タエも、その点では典型的な筑豊の女だったといえる。信介の性格の半分は、この母親によって後天的につくりあげられたものだろう。
信介の父親である若い頭領、伊吹重蔵が彼女に惚れたのも、タエのそんな気っぷの良さに惹かれたのだった。そのあげく栄町のカフェー〈玄海〉から前借のため身動きのできないタエを連れ出し、当時の新聞記事をにぎわす事件にまきこまれてしまったのだ。
信介が赤い香春岳の印象とむすびついて憶えている場面は、その時のことである。その日、重蔵は後を追いかけてきた土地の新興やくざのリーダー、塙竜五郎と素手で渡りあい、ぼろ布のように斬りきざまれながら相手の腕を折っている。それは彼が三十六歳の夏のことだった。

喧嘩はするが、刃物は使わぬ、というのが伊吹重蔵の信条だった。それは、大正十四年の、有名な伊田町平松越えの大喧嘩で、彼が骨身にこたえて学んだ実際の体験によるものだったらしい。

カフェー〈玄海〉の売れっ子女給、タエを連れ出そうと栄町に乗り込んだ時も、重蔵は素手だった。それどころか、まだ足手まといの信介をおぶって行ったくらいである。

塙竜五郎という新興やくざがタエに食いついていることは承知の上だった。その結果、全身を二十八ヵ所も斬りきざまれて、二ヵ月も病院通いを続ける破目におちいっている。

ただ、竜五郎が傷害罪やその他の罪も合わせて、すぐ刑務所へ行ったのでタエをそのまま家に入れることができたのは、ありがたかった。それまで、彼は男手ひとつで信介と二人の世帯をやりくりしてやってきたのだ。

タエは女給あがりとは思えぬ甲斐性のある女だった。白粉気(おしろいっけ)をすっかり落しても、なお目立つ顔をしていたが、気の強いのだけが欠点といえばいえたかもしれない。もっとも、その気っぷの良さに惚れたのだから、重蔵も文句は言えないところだったろう。

信介が二度目に強く香春岳を印象づけられたのは、あれはいつのことだったか。

その時、信介は第二の母親であるタエに手を引かれて小高い丘の上にいた。その丘からは、小さなマッチ箱を並べたような長屋が目の下に見え、黒の着物を着た男たちが、のろのろと動き回っているのだった。

白い花輪が、その薄汚れた長屋に似つかわしくない豪華さで立ち並んでいる。

その花輪の下を、白い布に包まれた細長い箱のようなものが動いて行く。突然、ひとりの女が長屋から飛び出してきて、その箱を抱えた男たちに素手で打ちかかり、動物のような声をあげて泣きわめくのが見えた。

「あのひとは何ばしよっとね」

と、信介はタエにたずねた。

「骨嚙みたい」

と、タエが答えた。

「ホネカミ？」

「ああ。骨嚙み」

「骨ば嚙むとね？」

「……」

タエは黙っていた。信介は頭の中で、ホネカミ、ホネカミ、とくり返した。

「人が死なしたとたい」

と、タエがぽつんと言った。

「落盤事故げな」

死人が出たのだ、と信介は思った。するとあの花輪の下に集っている男や女たちは、その死人の骨をみんなで嚙むのだろうか。

「ホネカミ――」

「そう。骨嚙み」
それが死者を弔う炭鉱の人間の神聖な行事だということが、幼い信介にはまだわかってはいなかった。ただ、骨嚙み、という語感と白い花輪にひどく無気味なものを感じて、両手を固くにぎりしめて立っていた。
女の泣き声にまじって、男たちの歌う数え唄が流れてくる。手拍子もきこえた。
その時、白い花輪の並ぶ小さな家々のかなたにあの香春岳があった。そしてその頂上のあたりは削りとられて白く無残に陽にはえていた。その部分は、まるで山の骨が肉を破って露出しているように見えた。
「ホネカミ、ホネカミ――」
信介は恐ろしさで奥歯をカチカチ鳴らしながら、タエの体に胸を押しつけた。タエが死んだら、父親の重蔵が彼女の骨を嚙むのだろうか、と信介は思い、息苦しい気持になった。そのとき、香春岳を見るのが、なぜかとても怖い気がしたことを信介はいつまでも忘れなかった。

さがり蜘蛛

この物語の本当の主人公、伊吹信介について語る前に、まずその父、重蔵、さらに祖父にあたる伊吹耕平について少し触れなければなるまい。信介がその体の奥に、この筑豊で死んだ二人の男の血を色濃く引いていることを見逃すことはできないからである。それは一言でいえば、性格というよりも風土の中から伝えられた一種の気質のようなものだといえるだろう。たとえば、

〈川筋気質〉

という言葉がある。筑豊をつらぬく遠賀川の川筋に生れ、その周辺に伝えられたヤマの男の気風である。

「なんちかんち言いなんな。理屈じゃなかたい！」

川筋の男たちは、しばしば決断を迫られた時に、そう言い放って起ってきた。男だけではない。筑豊では女たちの気性もそうだった。

伊吹信介の父、重蔵もよくこの言葉を口にしたものだ。

「理屈じゃなか！」

と、若い坑夫たちを一喝する父親の声を、信介は子供心にもはっきり憶えている。

重蔵の父親、すなわち伊吹信介にとって祖父に当る伊吹耕平は、そもそも遠賀川の川船船頭であった。だが、筑豊は彼の故郷ではない。伊吹耕平がどこから、どのようにしてこの土地にやって来たのかは、ほとんど誰も正確には知らなかったようだ。

明治初期の筑豊炭鉱は、各地から流れてきた貧農や、素性の知れない流れ者の働き場として荒々しい開拓地のような空気がみなぎっていた。

博奕ゃ目が出ず
切羽にゃナグれ
二足わらじで
遠賀下り

男たちの中には、兇状持ちもいたし、外題人(げだいにん)たちも幅をきかせていた。飲む、打つ、買う、の明け暮れの中で、激しい労働が続く。だが、この土地にいる限り、その人間の氏素性も、人柄も、過去も、誰もほじくり出して問題にしようとはしない。辛い労働をいといさえしなければ、三度の飯と、酒と、雨露をしのぐ屋根だけは、ついて回った。

原始的な採掘である。事故も多い。体と気力がなまれば、稼ぎも少なくなる。

遠賀土手ゆきゃ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com